

高退協ニユ

温泉昼食会

山崎 博幸

彼・・・この齢になるまで生きよるなんて想像もしなかつたねえ」

私・・・「その通りよ」

(問髪をいれず同意する)
この単純な会話は、当日土佐ロイヤルホテルの湯に浸かりに行く途中でのことです。お互いの脳裏を去来した中味は同じではなかつたかも知れないが、今お互いにおかれている平和の尊さは同時に理解しあつたと思つています。

翻つて温泉昼食会の企画から実行にいたるまでのお世話役の皆さん、現地の案内の方も含めてのご厚意やゆきとどいた配慮に心から感謝します。

土居廓中。山内一豊の重臣として安芸を治めた五藤氏とその家臣の住居群で、現在の登録有形文化財に指定された屋敷、玉石、黒光りする安芸瓦を重ねた重厚な塀、手入れの行き届いた土用竹やウバメガシの生垣もあり風情と気品が漂う。廓中では「廓中言葉」という争いを避ける独特の言葉遣いをするという。いちど話を聞いてみたい気がする。ゆつたりとした時間の流れに身を任せての探索は新しい発見にもつながる。

芸能発表会・望年会・作品展

日時 2006年12月5日(火)
17時～20時

会場 高知城ホール 4階

会費 5,000円

早くも望年会の時期になりました。今年も色々なことがありましたが、すべての大事小事を調整し、皆が集まって楽しい会にしましょう。併せて、おはこの芸や、自慢の作品を期待しています。

出展作品は当日16時までに会場へお持ちください。望年会後は、一週間1階ホールで展示します。

申込 11月30日(木)までに下記へ
樋口勇雄 (882-8185)
渡辺正子 (824-5191)
小島真子 (843-3007)
中村正博 (865-5270)

廓中、ら珍しの銅像、の小学、薪を背、読みふ、という、したの、政府は、動員の、庭に金、た。積、の他を具体的に羅列し、翌年五月には寺院の仏具、梵鐘など強制供出を命じた。小学校の金次郎像もこのころ供出されたようだ。
お茶の時間、自由に言いたい放題も面白かつた。

教育基本法「改悪」反対集会

九月二十四日RKCホールでこの集会在開かれまし。政権が全力を挙げて刻々と戦前の体制に戻していかうとしている今の日本に危惧を抱いている人達で会場はいつぱいでした。松山大学の解説が非常にわかりやすく、この内容を広く伝えたいと思ひました。小・中・高の元校長三三五名の方が改悪反対の意思表示に参加していただきました。大変心強く

「私達は三度 国に捨てられた」

I、ソ連の満州侵攻の際、開拓団を置き去りにして軍は撤退。数々の未帰還者がいること。二、りながら、死亡宣告手進め戸籍を抹消。III、ようやく帰つても十分な支援もなく、苦しい生活を強いられる。

中国残留孤児が国に損害賠償を求めている。戦況を知らながら敗戦直前まで開拓団を送り続けた政府。最高指導者会議で「わが帝国の将来のため、戦後はなるべく多くの民間人を現地に残し土着させる」との方針を開東軍に指示していたそうである。

残された開拓団は、集団自決・ソ連軍の攻撃・中国人からの襲撃・時には日本軍からも足手まといだと殺され、当時27万人のうち少なくとも8万人が死んだ。孤児たちは家族を失つて帰れなかつた。残留孤児たちは国に捨てられただけでなく、中国では日本人であるというだけで恨みの対象にされ差別を受け、文革の時期には過酷な迫害を受けた。

何十年ぶりによくよく帰国できて、4ヶ月8ヶ月の日本語訓練、月2万円の年金でほおり出す。これがわが日本政府のしたことである。「こんなにくさん帰つてきた」といわれたそうだが、40年50年置かれれば家族が増えるのは当たり前である。苦しい中で「日本人」の子どもを育ててくれた大恩ある養父母に会いにも墓参りにもいけない現実・・・孤児たちは「人間回復と老後の生活保障」を求めてようやく立ち上がった。しかし国は「戦争被害は等しく受忍しなければならぬ」「もうす

高知県高等学校退職教職員協議会
高知市丸ノ内2丁目11-10
TEL 088-1822-1682
TEL 088-1822-1682
郵便振替口座 01665012111893

に時効である」と主張している。

アムネスティ・インターナショナルは国境を越え、体制を越えてあらゆる国の人権問題に取り組んでいる団体だがその高知グループで先日原告の一人である石川さんを招いて話を聞いた。ソ連軍が迫る中、足が悪くて動けないお父さんに追い出されて一人で逃げなければならなかつた石川さん。中国で40年を過ごし帰つたときは言葉も思い出せなくなつていたという。中国で、そして日本で苦勞を重ねて生きてきて今72歳。二千人を越える全国の仲間と共に国に取るべき責任を取らず為闘っている。

最終段階にきた公判は次に十一月十七日午後一時十分から開かれる。その日はむこうの暮しを取材したビデオも公開される予定だ。傍聴に行くつもりである。おなじ旧満州ではあつても当時の首都だった「新京」にいた為、無事に帰り人並みな生活を送つた自分を申し訳なく思ひながら。(小島 真子)

活動日誌

- 【10月】
- 11日 温泉昼食会
- 18日 事務局会
- 24日 9条守る街頭宣伝
- 28日 高知の医療と介護

- 【11月】
- 2日 平和憲法を守る県民のつどい
- 9・10日 高退協一泊旅行
- 〃日 四プロ学習会
- 8日 事務局会
- 18・19日 全国革新懇交流集会



高教組だより

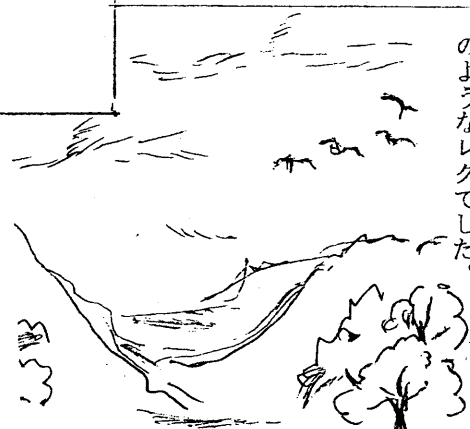
「中国四国九州ブロック
レクに参加して」
渡辺住香

10月21、22日と佐賀県の嬉野温泉に行つて来ました。まず前日の金曜に宿毛まで行き、8名が宿毛で一泊し、朝6時に出発し片島港へ向かいました。片島で最後の一人が合流し、宿毛佐伯フェリーで3時間かけて、九州へ渡りました。高速道路を目指して国道を走りましたが、高速に乗るまでに一時間以上もかかってしまい、最初の別府湾SAで慌てて軽食をとり、休憩もほとんどせずに佐賀に向かいました。午後2時ぐらいにやつと会場に到着しました。

くじにより、ノドされていた我が高知高教組チームは、とりあえず練習してみましたが、ほとんどのメンバーがソフトボールは初めてというので、とても心配な状態でした。しかし、補欠もいないので、そのまま試合に臨みました。一試合目は山口の岩国工業チームでした。男性ばかりの上に、投げる球も早く、守備も良く、こちらがバットに当たっても、すばやく一塁に返ってきてしまうという状態で、手も足も出ませんでした。攻撃はあつという間、守りは

長い、という感じで試合は進みました。大差で負けはしたものの、こちらにもヒットもあり、笹岡投手の頑張りや、強力助っ人として参加してくれた幡多教組の前田選手、県教済の松本選手の活躍もあり、なんとか一試合目を終えることができました。続いて三位決定戦と言われ、全員くたかただったので相手チーム(岡山)に、なんとか二回ぐらいで、と泣きを入れて行ったのですが、聞き入れてもらえず、もう一試合行いました。どうにかこうにか怪我もせず、無事に試合を終えました。

夜は、日本三大美肌の湯という温泉につかり、おいしいビールを飲み、各県と交流をはかりました。そして翌朝まだ真つ暗な6時に宿を出て、朝日に向かって高速を飛ばして佐賀に向かい、予定の船に乗りました。宿毛から最後の陸路を走り高知へ帰りました。行きは11時間、帰りは12時間、走行距離850キロということで、本日に修行のようなレクでした。



初歩き

- * 日時 2007・1・6 (土)
10:00 はりまや橋発
20:30頃 高知駅着
- * 場所 塚地 青竜寺 国民宿舎土佐
- * 費用 6500円
- * 申し込み 津野、竹島、上岡、小島まで
- * 詳細 別紙プリントあり

俳句

10月14日(土) 牧野植物園
合田青幹

覚えては忘れて秋の花名札
百体の水子地藏や小鳥来る

すがれ行く終の糶かたよひ大花野
こぼれ落ちさうで離れず赤秀あかほの実

潮菊に早し野路菊にも早し
沢枯梗咲き一水の爽やかに

浅黄斑あさまだら又戻り来し藤袴
そよ風に淡き影揺る桜蓼たぐ

遠景に介良富士十月桜かな
秋暑しナリヤランとはややこしや

川柳 小澤 幸泉
梅 檀 集①

一赦免花・いづこ・灯る
ぶりむいたカベに
熟年書いてみる

人生の赤字
路線をまだえず
半生の秘密を

みんな妻にあげ
山うぬぼれに
川が泣き
まされている
老いの秋

著書紹介

[JFAC E]
香長ゼミナールと

窪田充治の活動の記録
発行・香長ゼミナール館

香長ゼミナール10年の
活動を写真と3カ国語に
よつてまとめた記録集です。

「土佐の半世紀を
振り返つて」

著者・窪田充治
発行・部落問題研究所

戦後60年間に土佐の
高知で繰り広げられた
民主主義運動を中心に、
教育実践やその歴史的
背景についてまとめた
本です。

山川久三著(高退協会員)著
文学 対 註

その原点をもとめて
文芸社刊 定価 一、五七五円
文学、その狂気と叫び!

ホメロスの昔から流れつ
づけてきた文学の流れ。
その源流をさぐるために、
エッセイの形で凝らされた趣
向のかずかず。

掌編小説風、エッセイ風、小
論風、対話風、鼎談一趣向つき
ない超短編の群れ。
《内容》第一部 日本近現
代文学 第二部 日本古典
文学 第三部 外国文学

せひ、ご一読を、お薦めしま
す。注文は、お近くの書店か、
著者まで(なお、高退協・小澤
がお取り次ぎいたします)

訃報

東孝彦さん
9月25日、逝去されました。
吉村光正さん
10月11日、逝去されました。
慎んでお二人のご冥福をお祈り
します。

会費納入についてお願い

本年度も残り少なくなりました
未納の方は、年会費2000円
の納入をお願いします

秦東寺残日録

坪井 幹之

上高地再遊の旅

この夏のことである。上高地に出掛けた。わが一門の「兄弟会」恒例の旅行である。この上高地に最初に訪れた時は、滅多に来ることもなからうと、徳本(とくご)峠越えで入山した。島々まで車で行き、役場の駐車場に丁度日曜日であったので許可も得ずに駐車したが、昔のこととて別に問題も起こらなかった。この峠からの穂高連峰の眺めは、世に喧伝されているように見て耐えのあるものであった。明神池畔に泊まって、翌日槍に登った。この山行が最初の北アルプス登山でもあったので、感激は大きかったようである。

ついで、ある年の春、上高地で二泊した。河童橋の向いにあるホテル「白樺荘」の思い出は、いまだに心に焼き付いている。料金も高かったが、出された西洋料理はまことに美味であった。是非もう一度との思いが今回の計画に結実した。このホテルの名前を失念していた関係で、結局、幹事役の弟が予約したのは、河童橋たもとの「五千尺ホテル」であった。

さて、上高地の周遊であるが、先ず河童橋から奥、前、西の穂高の諸峰が岳沢の上に屹立している姿を眺めて満足、徳沢に向かった。梓川ぞいの樹林帯の道はものすごい人出で、槍・穂高に向かう人、下山する人でまさにアルプス銀座であった。徳沢園で昼食。ここには泊まったこともあるが、なんと言ってもある夏に食べたスパゲッシーの味は忘れられない。燕・大天井・常念・蝶・長塚を縦走して長い道を徳沢に降りた時のことである。もう一度食したいと念願していたが、残念、メニューから消えていた。はらいせに生ビールの大を喫した後、奥又白の谷まで歩を進めた。井上靖の小説「氷壁」の舞台になった前穂の東壁を覗いてみたかったわけである。これは個人的な希望であったが、同行者の大半が一緒してくれて有難かった。帰りは明神池に立ち寄ってホテルへ。

このホテルはこの地に一番最初に開業した格式の高い旅館で、今までに著名な登山客が数多く泊まっている。食事時は浴衣御法度で、そこそこの格好で食堂に入るように言われた。食事は純粋のフランス料理にウェーター付きで、高級感溢れた御馳走で堪能した。ただし、長兄の顔を立せてと、高額のワイン代を会費以外に「収奪」された。まだ書き足りないが、予定より長くなつたので、これで打ち切る。ただ、最後に上高地への入山が一段と便利、快適になったことをつけ加えておこう。今回初めて新釜トンネル、新安房トンネルを利用したがまことに快適、昔日の面影は姿を消していた。残念ではあるが、もはやこの地を訪れる機会はないであろう。

相撲ミニ知識(七十二)

林 勤

統・友綱貞太郎碑
高退協ニュース(二〇〇六・九・十三No.一四二)の相撲ミニ知識(七十二)に友綱貞太郎碑のことをかいたところ、早速、会員の門脇若夫先生から「香南市岸本にも友綱の碑がある」と知らせて下さった。

碑はバス停・月見山の西二十の山際国道55号線北側にある。碑の前は何度も通っているのに気づかなかつた。昔は現在の国道のなかにあつたが、国道開通の時に現在地に移したそうである。

碑は、高さ一・八七、幅三六、厚さ一六、花崗岩で、上面が七〇、四方、底部八五、四方高さ一、のセメントの台座にたつている。横には「香我美町指定史蹟、香我美町教育委員会昭和五十三年四月一日指定」の木柱がある。

正面には初代海山太郎事

友綱貞太郎出生之地

裏には大日本角力協会元取締

友綱貞太郎出生之地

西面には昭和十七年十二月吉日元橋山事浅香山治三郎建之とある。

碑の建立者、橋山とは、友綱の弟子・国ノ音、のち友響の引退後の親方名(橋山から浅香山に名跡変更)である。国ノ音は岐阜県出身、幕下一場所明治

四十四年二月に引退している。本県出身でもなく、あまり上位にまで上がっていない力士が単独で友綱親方の碑を建てていることは一寸意外に思ったが、そのことについてベースボール・マガジン社、相撲編集部門脇氏は「大世帯の友綱部屋にあって、国ノ音はしっかりしており、番頭役のような立場で親方を助け、親方に大変かわいがられていた。引退後の親方名跡取得の時も、友綱親方の力添えがあつたことと思われる。国ノ音は旅館の経営等もしており財力はあつたし親方から受けた生涯の恩義に報いるため、親方の出生地へ、」

この碑は昭和十七年に建立されているが、先の号で述べた高知市相撲場の碑も昭和十七年に「門下生有志」によつて建てられている。お互いに話し合いがあつて、期を同じくしての建立ではなからうか。

碑のすぐ東に「海の平穏と大漁祈願」の峯本神社がありその鳥居は明治四十四年五月に建てられているが、向つて左側の柱には「友綱貞太郎」と刻まれている。

昔から香南地区は相撲どころとして名の通つた土地であるが、今回、大相撲力士の出身地や碑、墓が沢山あること一即ち旧香我美町岸本は友綱貞太郎出生地の碑、玉錦(本県出身一人の横綱、昭和十三年十二月没)の墓があり、また、行司最高位・二十九代木村庄之助(玉錦の墓のすぐ近くで育つ。平成十三年三月限りで引退、現在市川市在住)の出身地でもある。

更に、岸本の西隣、旧赤岡町は初代土州山、二代目土州山の出身地でもある等に改めて相撲どころの感を深くした所である。因みに玉錦は友綱の弟子である二代目海山(高知市比島出身)の弟子であり、木村庄之助はその玉錦ゆかりの二所ノ関部屋に入門している。即ち友綱―玉錦―木村庄之助はくしくも時を隔てての師弟関係、孫弟子にあたる。

短歌

カーテン

山本晶子

気になりて二つのレストランい
つも見る客三人おり何がなく嬉
し

ひと言のよけいな吾を責めてお
りつい口に出るその言の葉を

家中のカーテン洗い母介護し午
前二時となり床につきたり

「石の骨」

榊原忠彦

清張の「石の骨」読みし感動あ
らた「民芸」舞台は「明石原人」

便利なりし簡易郵便局閉鎖せり
身近に受くる小泉遺産

新渡戸から承けし南原ら敗戦後
平和思想の基礎を築きし
―東京女子大湊晶子学長講演

秋の温泉昼食会

叶岡淑子

好天に恵まれ九人の仲間らと
秋いっぱい安芸市散策

「野良時計」「武家屋敷跡」ガイ
ド聴き童謡口ずさみ老いなど忘
れ

こもこもに近況交わし明日への
活力もらう吾ら高退協

第6回高退協すき一旅行ご案内

07年のすき一旅行を航空便接続の
関係で北海道留寿都スキー場にしまし
た。

具体的な要項は別紙通りです。
少しでも滑られる方の参加をお待ち
しています。



旅 ロシアを旅して

三谷美佐子

八月に八日間、友人とJTB企画でロシアを旅した。何故ロシアかとよく聞かれるが、学生時代にロシアについて学ぶ機会が殆んどなかったこと、ソビエト政権の崩壊からロシア連邦となって社会がどのようにに変わり、国民の生活はどうなのかを実際に見てみたかったこと、ロマノフ王朝の栄華を物語る文化遺産にも興味があったこと等から一度は訪れたいと思っていたからである。

新潟空港を夕刻に発ち、イルクーツクにて宿泊し、(約五時間の飛行)翌二日目はバイカル湖とイルクーツクの市内観光。シベリアの真珠といわれる淡水湖としては世界一大きなバイカル湖はまるで海のように、波も高い時は二メートルにも及ぶという。生態学博物館で、バイカル湖の生物や地形を学び、一時間のクルーズを楽しんだ。その後、最古の木造の教会などを見学する。イルクーツクはしっかりと落ち着いた街で、質素な小ぢんまりした教会が多かった。

三日目はモスクワの市内観光である。「赤の広場」の名称は赤レンガの建物に由来していると思っていたが、古代スラブ語で「美しい広場」という意味だとのこと。テレビニュースでよく見たソ連時代の閱兵の場所はレーニン廟の上であった。広場を囲むようにレーニン廟やスパスカヤ塔、カザンの聖母聖堂、グム百貨店(国営)等が建ち並び、その向こうにクレムリンが見える。かつてのソ連の象徴であったこの広場に立っていると胸が高鳴り、今ここに自分が居ることが不思議に思えた。

四日目はクレムリン観光とトレチャコフ美術館の見学、クレムリンの周囲は2235m。周囲をぐるりと城壁が囲んでいる。その中に教会や宝物殿、大統領官邸もある。その夜モスクワから夜行寝台列車でサンクトペテルブルグへ。車窓の外は果てしなく荒涼とした平原が続く。

五日目はサンクトペテルブルグの市内観光。モスクワが政治都市ならばサンクトペテルブルグは文化都市といえよ

う。高層建築物がないので空が広い。教会や寺院の外壁はベージュと淡い青や緑の落ち着いた色調で、サンクトペテルブルグの街にとけこんでいる。その代表がエカテリーナ宮殿である。エカテリーナ女帝の為に建設された宮殿の内部は豪華絢爛。金を壁一面にあしらった大広間や2003年に再現された琥珀の間は有名である。調度類も世界各国の超一流品ばかりである。地震のないお国柄が高価な壺が台の上にそのまま置いてあるのには驚いた。

六日目は世界屈指のエルミタージュ美術館の見学。各国の絵画・彫像・陶器などのコレクションは300万点以上にのぼる。400の部屋全体が美術品である。一日かけて見学したが、とても見きれぬものではない。夜はバレエ「くるみ割り人形」を鑑賞した。

七日目はピョートル大帝の夏の宮殿と庭園観光。フィンランド湾に面した美しい噴水と庭園・宮殿のアンサンブルはすばらしかった。夜、サンクトペテルブルグを発ち、イルクーツク経由で新潟空港へ帰った。

ロシアはヨーロッパでもアジアでもない不思議な魅力ある国だ。外国人が自由にロシアへ旅行できるようにはなつたが、発着の遅れや機体の古さ等、航空事情は悪く、入国手続きに長時間かかる。(私たちは二時間もかかった)旅の途中で予定変更が出来ない等、観光客への対応は改善の余地があると思う。旅行の最終日、朝食をとっているとホテルの人がキャビアを持ってきて「どうぞ」という。試食してみると、口の中にとけこみ、えもいわれぬほど美味であった。朝食を終える頃、再びやってくる「千円」と言う。青ラベルの同じ缶であったので「安いねえ」と買って買った。

帰国して開缶してみると油くさい偽物であった、苦笑して捨てた。だが、ロシア料理は野菜が豊富で、どれもとてもおいしかった。モスクワでは日本料理や回転寿司が流行している。日本人とロシア人の味覚は似かよっているかもしれない。ロシアはロシア正教の教会文化と、1700年から800年代に君臨したピョートル大帝やエカテリーナ二

世の栄華を極めた王朝文化が今もなお息づいている。これらの遺産・財宝は国有財産である。石油資源が豊かで経済成長は著しく、国民は自由な生活を楽しんでいるように見えた。が、一方で広大な土地を抱え都市と地方の格差も見られるようだ。モスクワは車があふれ、行き交う人々はおしゃれな服装をし街は活気にあふれていたが、イルクーツクでは汚れた服をきて、濁った川の水を飲んでいた老婦人や物乞いをする人も見かけた。しかし、ロシアは今後、益々発展し、国力を増すことはまちがいないと感じた旅であった。

「一知」

老後の安心を根こそぎ奪う

先の国会で成立した医療「改革」法によって、高齢者医療の大改善が進められようとしています。

地域から入所介護や入院のベットがなくなる

二〇二二年度を目標に、地域で高齢者の入所介護や入院を担っている療養病床を二二三万床も削減する計画です(医療療養病床二五万床から一五万床に、介護療養病床一三万床は廃止)

政府は、老人保健施設や在宅、有料老人ホーム、ケアハウス、グループホームへ移行させるといっています。しかし、老人保健施設は整備基準があり、地域によっては、増やせません。在宅といっても、それが困難なので施設に入っている人がほとんどです。有料老人ホームなどに入所するには、多額の費用がかかります。現在、特別養護老人ホームの待機者は全国で三八万人を超えています。すでに七月一日から廃止・削減計画が始まり、退所者が生まれています。このままでは多数の「介護難民」「療養難民」を生み出すことになりません。また、この法律には、高齢者の患者負担を大幅

老眼鏡

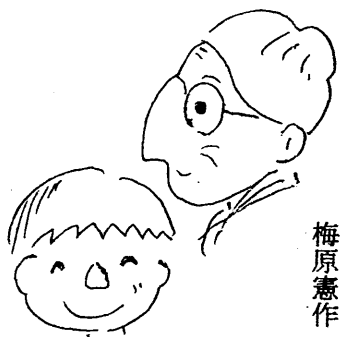
『わが戦争体験の日々』を読んで

戦後六十一年目の八月十五日、表記の本が高知ペンクラブ(高橋正会長)により編集・発行されました。

執筆者は八九名、「1920年代後半から30年代、40年代うまれの子供、少女たちも、太平洋戦争に巻き込まれていった。だがこの世代の戦争体験はほとんど記録されずにきた。すでに70歳を超えたこの世代の人々が、今、戦争の記憶を語る(高知ペンクラブ)とのべているように、直接の戦場や兵役体験より一世代若い層女性たち、社会的弱者としての『戦後』体験が主となっています。グラビアの二四枚の写真以外は本文には一枚の写真も使われていません。さすがペンクラブ会員と応募者、己が人生の一番のポイントを各人が見開きの2ページに絞り間見事にまとめています。表現形式は散文、記録文、詩歌あり多様です。もう一つの特徴は、書き手は、各界の重鎮であった方が多数参加されておられるのに、お名前以外は年齢性別、住所、肩書きなどは一切紹介されず、一人の人間、一市民、市井の人としての目線で参加です。どのページを開いても読み応えがあり、教室で、お茶の間で、井戸端で是非とも新旧の世代で活用し、話題にしたいです。

本書は記録文化に新しいジャンルを開いたものであり、高退協なれば、これをひき継ぎ、発展できます。特に、語りのみの高齢者の聞き役、書き役もできます。

梅原憲作



に引き上げることも含まれていません。さらに、厚労省は、〇六年の診療報酬改定でリハビリの日数制限を実施しました。このリハビリの打ち切りは、保険による診療の打ち切りの始まりであるばかりでなく、障害を持った人の「人間の可能性」「人間の尊厳」を否定するものであると言わざるをえません。(文責 小澤)